

2022年6月3日(金)・9日(木)・16日(木)開催 連続セミナー「森林火災と地球温暖化—燃える森から地球の未来を守れるか」

https://www.gef.or.jp/news/event/ffseminar_1/

第2回セミナー

オーストラリアの気候変動による火災—森林と生物多様性への影響、原因と対策

オーストラリア国立大学

デイビッド・リンデンマイヤー教授

2019年から2020年にかけて起こった森林火災では、1200万ha以上の森林が焼け、30億匹以上の動物が失われました。オーストラリア経済への損害は1000億ドルに上ります。ただし、これは1回の火災による被害にすぎません。その他の多くの火災の状況を見ながら、天然林と火災の関係を理解する必要があります。初めに火災が起こる前の森林の様子、火災中と火災後の出来事、そして火災の前と後の相互作用による深刻度の変化について紹介します。さらに焼けた森を伐採するとどうなるか、最後に火災のリスクが高まっている森林の管理についても報告します。

気候変動と火災の関係

気候変動と火災の間には密接な関係があります。森林火災に影響する大きな要因は長期的な気候と短期的な天候です。短期的な天候とは、暑さ、風力などの火災発生時の状況のことをいいます。森林管理の方法などを検討する際には、火災時の天候がどうだったかを考慮する必要があります。

昨今、気候の急激な変化が起きています。そして最も重要な火災の要因は気温です。大気中の二酸化炭素の量と気温の間には密接な関係があります。大気中の二酸化炭素の濃度は、過去100年から200年の間に280ppmから421ppmまで上がっています。今、世界は歴史上、最も暑くて乾燥しています。IPCCによると、2030年には気温が1.5度上昇すると予測されていますが、オーストラリア大陸では既にそれが起こっています。これにより近年、極端な森林火災危険指数を示す日が増えていきます。私が生まれた1960年と比べ、森林火災危険指数の高い日数は10倍に増えています。世界的に見ても、気候が変動すればするほど森林火災が増えることが多くの調査で分かっています。

気候や天候の他にも、森林火災に影響する重要な要素があります。たとえば、老齢林に火災が発生した場合、火災の深刻度は低く、動物が生き残る可能性が高いことが分かってきました。そして森林が老齢であればあるほど、動植物のコロニーの形成や森林の回復が早まる可能性が高くなります。一方、樹齢が若い幼齢林、あるいは伐採されたばかりの森林の火災はより深刻になりやすく、火災の後に残る木が少なく、森林における種の回復も非常に遅くなります。

伐採と火災の因果関係

伐採された森では深刻度の高い火災が起こりやすいことが分かっています。森林は樹齢7年から40年の間に、激しく焼ける可能性が非常に高くなります。樹齢30年程度で高さ40メートルの木であれば、炎の高さは50メートルから55メートルに達します。この規模の山火事では人が亡くなり、住居や財産の被害も発生し得ます。2019年と2020年に発生した森林火災の研究では、伐採によって山火事の状況が悪化したことが判明しました。2021年に発表した論文において、2019年と2020年の山火事の調査結果にも同じパターンが見られ、樹冠が燃えるリスクは樹齢10年から40年の間で非常に高くなっています。このような伐採と山火事の関係は、世界各地の湿潤林でも見られます。

なぜこのような因果関係が生まれるのでしょうか。森林伐採後の残渣が適切に取り除かれないことによって、火災の燃料となります。また、伐採によって森が乾き、木生シダが失われることで土壌も乾燥します。また、伐採によって森林構造が変化し、燃えやすい若木が増加します。最近の研究では、若い森林のほうが老齢林よりも暖かく、気温が激しく上下する可能性が高いことが分かっています。こうした伐採の影響は、伐採後、40年程度続きます。

森林を間伐すれば深刻な火災リスクが減少すると言う人もいます。われわれは2009年と2019-2020年に起こった森林火災の後、それぞれの火災に間伐が与えた影響について調査しました。その結果、間伐に火災の深刻度を減少させる効果はないことが分かりました。場合によっては、間伐により火災の深刻度が増大することもあります。

火災後に起こること

2020年に発表した論文では、ブラックサマーの火災について分析し、いくつかの重要なことを発見しました。

まず、毎年オーストラリアで起こる森林火災の面積が大幅に増えています。2003年以降、オーストラリアで100万ヘクタール以上の大規模な火災が3回起こっています。同規模の火災は、20世紀と19世紀には1回ずつしか起こっていません。

そして火災の面積だけでなく、件数も増加しています。火災は6年後に再び発生し、同じ森林を燃やしたケースもあります。25年間に同じ場所で4回の火災が発生する事例もありました。その結果、ビクトリア州では1995年以降、約80パーセントのオールド・グロースの森林が消失しました。



また、いくつかの森林生態系には、老齢林の被覆率が大きく下がっているものもあります。マウンテン・アッシュの森林で現在残っている未燃焼面積は1.16パーセントです。アルパイン・アッシュに関しては0.47パーセントしか

ありません。

多くの森林で火災の発生件数と焼失面積が増えています。これらの火災が起こった森林では、今後5年間に伐採が計画されています。これらの森林生態系の中には、極度の崩壊の危機に直面している所もあります。森林が回復できないほどの火災が起こり、回復する前にまた新たな火災が起こっています。

残っている区画の中には燃えていない場所もあります。2019-2020年の大規模な火災では、1200万haの地域が燃え、火災が広がった地域の内、未燃焼地域は10パーセントにとどまります。未燃焼地域の94%は1ha未満の非常に小さな区画です。

その未燃焼地域を伐採などのかく乱から守らなければなりません。現在、森林伐採と生物多様性の保護との間で非常に大きな対立が起こっています。裁判になっているケースでは、ビクトリア州で伐採をしている企業が、伐採地の多くが危機に瀕する生態系を含んでいることを認めています。



サルベージ伐採が深刻度の高い火災をもたらすリスク

また、オーストラリアや北米などでは焼けてしまった森林を伐採する「サルベージ伐採」が行われています。

オーストラリアや北米では、自然に起こる火災でかく乱されたり、虫による被害を受けたりした場合、数週間から数カ月後にその森林は伐採されます。そうすることで少しでも木材の経済的価値を得るためです。つまり森林では自然のかく乱と人為的なかく乱が立て続けに起こります。動植物種の多くはそれに適応できず、生存できません。サルベージ伐採は生物多様性に極めて大きな負の被害を引き起こします。

サルベージ伐採では大きな老木を全て撤去します。これにより、森林回復に100年から200年を要することになり、木性シダのような再発芽するはずの植物も失われます。さらに土壌は80年以上にわたって損傷を受け、炭素を含む土壌の栄養分が失われます。また、人間が必要とする水の産出量は大幅に減少します。鳥類、植物、無脊椎動物などの種の多

様性にも大きな悪影響を与えます。さらにサルベージ伐採が深刻度の高い火災をもたらすリスクも指摘されています。

火災後の生物多様性

火災前と火災後の相互作用について説明します。通常、森林は75年から150年の間隔で火災が起こります。これは自然なかく乱です。しかし現在、100万ヘクタール以上の森林において、非常に大規模な火災が起こっています。多くのエリアが可燃性の高い若木の森林であるため、森林全体の燃焼性も高くなります。そして木が十分に成長する前に燃えるため、その森林は老齢林になることができません。これがランドスケープ・トラップ（森林地帯のわな）と呼ばれる現象です。

種によっては深刻な火災を生き残る生物もいます。さらにコロニーの再形成が早い種もいます。しかし火災後、非常に長い間をかけて減少していく種もいます。ビクトリア州の象徴となっているフクロモモンガダマシの個体数は2009年の火災後に大幅に減少しました。グレーターグライダーと呼ばれる小さなコアラのような動物で、現在、絶滅危惧種に指定されています。過去25年の間に生息数が3分の2以上も減っています。

過去25年間の動植物の研究により、フクロネズミ、モモンガ、鳥類などの全ての個体数が減っていることが分かっています。これらの個体数減少の大きな要因が伐採です。老齢林と強い結びつきがある鳥類の生息数も減っています。木材譲渡計画の下、絶滅危惧種にとって非常に価値の高い森林で伐採が行われています。こうした伐採により森が分断され、これらの動物の保護システムが適切に働いていません。これらの結論として、動植物の個体数が減少しています。

原生林の伐採産業が抱える問題

伐採できる資源の量が急速に減っています。また、業界における雇用が縮小し、収益性も下がっています。生物多様性の保全との矛盾が生まれ、水などの他の資源との競合も見られます。そして伐採された森林には、より深刻度の高い火災を起こす危険性があります。さらにこの業界には公的支援が少ないため、事業の継続が難しい状況にあります。森林管理協議会（FSC）の認証の取得も難しくなっています。

通常火災の発生頻度は75年から150年に1度で、木材の成長に必要な期間は100年といわれています。しかし火災の頻度が上がることにより、森林が80～100年の年齢に成長できる確率は、15～20%程になっています。つまり、収穫可能な樹齢に達する樹木はごくわずかです。

別の論文では、広範囲で違法伐採が行われている現状を報告しています。傾斜が30度以上の区画は伐採してはいけない決まりがあるものの、伐採された地域の70パーセントが傾斜30度以上の場所です。過剰伐採により資源がほとんどなくなっていることが原因です。

国連の環境・経済統合勘定（System of Environmental-Economic Accounting）を利用し

た分析「ビクトリア州中央高地における生態系勘定」では、森林の価値を経済的利用の観点から捉えました。この州では多くの伐採が行われています。この会計においては、水、炭素、木材、観光、農業、生物多様性に関するデータを集めました。さまざまな産業価値を分析した結果、農業、特にワイン生産業とイチゴなどの生産業の規模が非常に大きく、3億ドル以上となっています。また、水供給の価値も3億ドル以上です。炭素の価値は5000万ドル、ラジアータパインの人工林の産業価値は3000万ドル、原生林の価値は1200万ドルしかありません。パルプやウッドチップのみを生産し、価値の高い製材を作っていないのがその要因です。

この結果は、ビクトリア政府の事業計画にも見ることができます。VicForests という政府系の伐採会社の資料によると、過去10年間で毎年、平均550万ドルの赤字が出ており、ビクトリア州最大の森林管理区での木材収穫事業は既に採算が取れなくなっていることが分かります。また、森林伐採コストが伐採による売り上げよりも大きいことが分かっ



ます。過去4年間で損失が4倍に増えています。

さらに細かい分析をすると、ビクトリア州では、原生林伐採がないほうが1億1000万ドル～1億9200万ドルの得になることが分かっています。

オーストラリアの林業の未来

これが木材産業の終わりではないことを理解しておく必要があります。オーストラリアには二つの木材産業があります。人工林の伐採産業と原生林の伐採産業です。原生林の伐採産業では主にチップとパルプを作っています。原生林で伐採される木材の87パーセントがチップやパルプになっています。オーストラリアの広葉樹から作られるパルプ丸太の75%程度が輸出されています。パルプ製造量390万トンのうちの290万トンに当たります。ビクトリア州の製材の88%が人工林から来ています。人工林は単位面積当たりで原生林よりはるかに多くの木材を生産します。そして大部分の雇用が創出されているのも人工林の

伐採産業です。大規模植林は原生林よりも火災に対して防御しやすいことも分かっています。

オーストラリアの林業の未来はどうなっていくのでしょうか。まず原生林の伐採を止めるべきです。そして、生物多様性を守るため、火災を減らすため、そして炭素蓄積量と水の生産量を増やすため、原生林を管理・保存しなければなりません。木材製品は人工林から作るべきです。人工林は温室効果ガスの排出量が木材生産量に対して少なく、その資産としての価値は天然林よりも高いといわれています。人工林のデザイン、都市林や農地林業に注力することで必要な木材製品が生産できます。さらに生物多様性を守りながら炭素を貯留し、水も豊富に生産できるでしょう。

コメント

ウィルダネス・ソサイエティ ナショナルキャンペーン・ディレクター
アメリア・ヤング氏

マウンテン・アッシュの貴重な生態系

ビクトリア州のマウンテン・アッシュの森（ビクトリア州やオーストラリア南部のユーカリ林）は非常に特別で、世界的に重要な場所です。これはこのユーカリ林が世界中、他のどこにも見つからない樹種であるためです。しかし現在、その場所は大きな脅威にさらされ、国際自然保護連合（IUCN）によって絶滅の危機に瀕している生態系に認定されています。この森林は、高い保護価値を持っています。これらの森林は絶滅の危機にある生物種の重要な生息地であり、メルボルンなどの大都市圏にきれいな水を供給する源となっています。これらの森林が低木林火災によって深刻な被害を受けていると聞きました。その大きな理由の一つが長年にわたる過剰な森林伐採です。その結果、多くの森林が失われ、老齢林が、多様性の少ない若い森林に変わってしまっています。



この特別なマウンテン・アッシュのユーカリの森は、オーストラリアの動植物と自然環境が世界の他の地域と比べてユニークであることの一例です。オーストラリアは非常に古い大陸で、長い間他の大陸から隔離されてきたため、オーストラリアの動植物は乾燥した環境に適応できるように特殊な進化を遂げてきました。

マウンテン・アッシュの森林破壊の原因

本日テーマになっている伐採は、紙やパルプ、パッケージ製品の需要によって起こっています。こうした価値の低い製品に転換される森の面積は非常に大

きいです。伐採される 10 本の丸太のうち、9 本はパルプにされ、紙やパッケージ製品ののために使われています。家を建てたり家具を作ったりすることには使われていません。

こうした伐採産業をリードしているオパール社という大手企業があります。その親会社は日本製紙グループです。このオパール社は毎年、何億立方メートルにもなる木材を 100 年近くにわたって伐採してきました。そうした伐採の結果、オーストラリアが森林破壊のホットスポットになっているのは驚くべきことではありません。生物多様性の損失速度に関しても、オーストラリアはインドネシアに次いで 2 番目に深刻です。原因は森林の生息地の喪失です。

オーストラリアの森林破壊はアマゾンのブラジルやアフリカのコンゴ地域といった世界的に知られているホットスポットと同等に深刻だと言われています。オーストラリア南部ではパルプや紙、パッケージ製品の需要によって伐採が行われていますが、オーストラリア北部では牛肉の生産が森林破壊の原因となっています。牛を放牧するために森林が皆伐されています。

伐採の合法性の問題～既存の法律の問題点

また、もう一つの根深い問題が、リンデンマイヤー先生も触れていた伐採の合法性です。ビクトリア州のマウンテン・アッシュの森で伐採を続ける一つの企業 (VicForests) は、その伐採が本当に合法なのか裁判で強く疑問視されてきました。そして連邦裁判所は、絶滅危惧種を守るビクトリア州レベルの法律に照らして、その伐採を違法であると判断しました。

この判決は、このマウンテン・アッシュで伐採された木材を使った製品が合法だと、誰も確証を持ってないことを意味します。組織的な違法性のリスクがあります。2020 年に連邦政府がその判決を出した後、他にも多くの訴訟が裁判所に提起されました。現在、11 件の裁判が係争中です。いずれも VicForests の森林伐採の合法性を問う裁判です。

連邦裁判所で判決が言い渡されたとき、私たちは「判決により、原生林商業伐採の信じ難いほどの非持続性と、政府所有の伐採企業が野生生物を絶滅に追いやることを阻止できないという政府の壊滅的な失敗があらわになった」という声明を出しました。現在、マウンテン・アッシュのユーカリ林サプライチェーンに関わる企業は、そうした違法リスクにさらされています。

また、伐採によって生物種の絶滅リスクが高くなる要因の一つに、オーストラリアの環境・生物多様性保護法 (EPBC 法) が天然林の伐採に適用されていない現状があります。天然林の伐採は法律の対象から除外されているのです。オーストラリアの法律は綿密に作られ、適切に試行されているといわれますが、現実はその評価から大きくかけ離れています。最近のレビューは、この EPBC 法はあまり有効ではなく、重要な環境を守ることに十分な効果を発揮しておらず、現在の環境課題だけでなく、将来の環境課題の解決にも不十分だとされています。天然林の伐採には適用さえされません。州レベルの法律によって伐採が違

法だと見なされたとしても、連邦法の下では適用外であり違法だとは見なされません。

しかし仮に紙の上で伐採が合法だと認められたとしても、それが倫理的で容認可能であるとは言えません。天然林の伐採は連邦政府の環境・生物多様性保護法の適用外であり、合法性が保証された信頼できるものではありません。オーストラリアの伐採産業は、環境・生物多様性保護法の適用外になっているたった一つの産業です。

なぜ既存の法律が頼りにならないのでしょうか。まず州の法律も連邦の法律も、正しく適用・施行されていない問題があります。必要な改革も行われていません。リンデンマイヤー先生が報告したような大規模な森林火災が起こった後、その悪化を防ぐための適切な措置も取られていません。また、それらの森林やそこに生息する動植物が世界的に価値のあるものだと認められていません。オーストラリアの森林は非常に特別でありながら、パルプ生産のための伐採は次々と行われています。加えて、この伐採に関する独立した監督や取り締まりが十分でなく、説明責任も確保されていません。

地域社会も支持しない伐採

地域社会もこうした伐採を支持していません。政府の調査によると、ビクトリア州の住民の2人に1人が森林を伐採から守ってほしいと訴えています。さらに3人に1人が森林



を生態系生息地として保存することが大事であり、水と気候のためにも管理すべきだと回答しています。つまり伐採は地域住民にとっても評判がよくなく、それらの森林から作られた製品を社会的に許容して良いのか疑問視されます。

もう一つの重要な側面は、森林の伝統的な所有者、つまりアボリジニ（ファースト・ネーション）の人たちも伐採についてさまざまな意見を持っていることです。オーストラリアでは、伐採にあたって伝統的な所有者の許可や同意は求められません。アボリジニの人たちはさまざまな形で森林伐採への反対意見を表明してきました。これは伐採が社会的な許可を得られていないことの重要な側面の一つと言えます。

求められる変化

リンデンマイヤー先生が言ったとおり、何十年にもわたって過伐採が行われた結果、厳しい現実が生まれています。野生生物が絶滅に向かい、森林生態系が崩壊しつつあるだけでなく、木材も枯渇し始めています。ビクトリア州政府は2030年までに天然林伐採をやめ、人工林産業に移行していくことをコミットしています。これを前倒しする必要があります。天然林は今後8年間の伐採に耐えられません。人工林産業への移行を加速すべきです。そ

の移行を速めるために産業界が果たすべき役割があると、ウィルダネス・ソサイエティは考えています。

ビジネスチャンスもあります。企業は森林の保全を望む地域社会を支援すべきです。また、サプライチェーンにおける違法性を避けることは企業にとっても重要なはずですが、それらの対策によって、企業は絶滅の危機に瀕する野生生物の生存・繁栄を支援することができます。天然林の伐採をやめ、人工林を有効利用するという避け難い変化を、率先して導くことができます。自然保護者や科学者、コミュニティもその転換を早く起こすことを企業に求めています。

ウィルダネス・ソサイエティは、マウンテン・アッシュの木材を伐採して包装材を作ることによる生物多様性へのリスクを危惧しています。私たちは、生物多様性のリスクを低減・回避するために、政府およびマウンテン・アッシュの森林由来の製品に関わる企業に、倫理的かつ効果的な意思決定を行うことを求めます。政府だけに森林の保全を頼ってはいられません。企業も積極的に役割を果たす必要があります。

そうした取り組みを支援するために、企業がデューデリジェンスを実施し、サプライチェーンにおけるリスクを特定する枠組みがあります。リスク評価を実施し、リスクを緩和する措置を導入することも非常に重要です。

いくつかの国際的な取り組みへの参画を提案します。森林・土地利用に関するグラスゴー・リーダーズ宣言では、世界の森林をどのように管理すべきかについて基準を設定しました。オーストラリアはその宣言に署名して



いますが、マウンテン・アッシュの伐採を継続しています。また、リスクを管理し伐採による悪影響を緩和する方法を探るために、Accountability Framework のような枠組みが有効です。先ほどリンデンマイヤー先生が FSC（森林管理協議会）について言及しました。現在、マウンテン・アッシュの森林から調達される木材はレスポンシブル・ウッドの認証しか得ていません。この認証は、持続可能性の保証として信頼できません。これまで話してきたとおり環境への影響が大きく、違法性のリスクも高いためです。この森林において唯一の適切な認証が、FSC の完全森林管理認証 (Full FM) です。この森林における現在の管理木材標準や加工・流通過程 (CoC) 認証は全く不十分で受け入れ難いものです。

企業に求めること～強力かつ公式で透明な方針の策定と実行

各企業には、紙やパッケージといったコモディティについて、森林破壊リスクへのエクスポージャーを評価し、オーストラリアの森林保護に取り組み、サプライチェーンから森林破壊を排除するための強力かつ公式で透明な方針を策定することを求めます。

そして、明確な期限付きの行動計画の下で、森林破壊・劣化が排除されたサプライチェ

ーンの継続的な検証を行い、その方針を実行することを求めます。それにより、紙、パルプ、パッケージ製品が森林破壊の原因になっていないことを担保できるでしょう。

また、セクター全体の改革に積極的に取り組み、森林と低木林を保護するための政府および市民社会の取り組みを支援する必要があります。

最後に、これらの目標を達成するためには、「保護価値の高い原生林や残存林などにおける森林破壊および劣化・転換をサプライチェーンと製品から排除する」というコミットメントが大変重要です。

質疑応答

質問:伐採されている森林の所有者は誰か？

リンデンマイヤー氏：天然林の所有者は州と州の納税者です。人工林の一部は民間所有です。

ヤング氏：付け加えます。伐採されている森林は「クラウンランド」と呼ばれる国の土地です。しかし先住民から奪った土地であることを忘れてはなりません。本来の森林の所有者は先住民です。州政府が植民地下で土地を横領し、政府の森林として管理しています。

質問:老齢林の火災よりも壮齢林や若齢林の火災のほうが生物多様性への影響は大きいか？また、壮齢林の火災が多い理由は？

リンデンマイヤー氏：老齢林は生物多様性にとって非常に重要です。その理由の一つは、老齢林の木の穴を動物が使うことです。そうした動物が生息できる穴を作るには120年から150年が必要です。鳥類をはじめとする動物にとっては、花に蜜や花粉を持つ木も非常に重要です。

壮齢林や若齢林は40年から100年ほど前に伐採されていて、老齢林に成長するための十分な時間がなく、若い木ほど燃えやすい特徴があります。従って、火災やその後に行われる伐採の影響により、森林のほとんどを若い木が占めることとなります。これらを背景に、過去200年で森林の構成が変化しています。以前は古い老齢林の中に小さい若齢林がありましたが、現在は幼齢林の中にわずかな老齢林がある状況となっています。これが生物多様性に大きな影響を及ぼしています。

また、炭素にも影響があります。現在、森林に蓄積される炭素量は、本来あるべき量（老齢林であれば貯蔵できていたはずの量）の25パーセントにとどまっています。これが炭素貯蔵の観点で気候変動に大きな影響を与えています。

森林の炭素には二つの側面があります。一つ目は炭素が固定・隔離されるスピード、二つ目は炭素の蓄積量です。ほとんどの炭素は老齢林で蓄積されます。

まず伐採により多くの木材が取り除かれることで、森林の成長は止まります。つまり炭素の貯蔵量が不足することになります。

また、湿潤林を守らなければならない理由は、湿潤林が極めて多くの炭素を蓄積するためです。炭素の貯蔵には老齢林が適しています。紙やパルプ、チップなどの木材製品を作るために天然林が伐採されると、木のライフサイクルは短くなります。土壌は埋め立てられ、新たに木が収穫できるまでに長い時間がかかります。炭素のサイクルを分析した結果、天然林のほとんどが木材となった場合、カーボンサイクルが非常に長くなることが分かりました。結果的に天然林における温室効果ガスの排出量が多くなり、人工林との間に大きな差が生まれます。

質問: オーストラリアの木材を利用している日本企業はどのような対応をすべきか? FSC、森林管理認証や植林木のみを利用すべきか? これまでに日本企業や金融機関に対して働き掛けを行ったことはあるか?

ヤング氏: 木材製品を扱っている日本企業には、森林劣化防止のポリシーをしっかりと理解し、コミュニティへのサポートと森林改善への支援をお願いしたいです。さらにデューデリジェンスを行い、継続的な違法伐採に当たらないことを確認してほしいです。

また、科学の情報に基づいてポリシーを検討する必要があります。伐採産業に出資をしている日本企業の多くが、オーストラリアで起こっている問題の深刻さを理解できていないのではないのでしょうか。生物多様性へのリスクのスクリーニングが十分に行われていないのかもしれませんが。企業が問題をしっかりと理解せず、他の国々から生物多様性の重要性の認識が得られていないことはオーストラリアにとって大きな問題です。野生生物の絶滅の危機、あるいは森林火災や気候変動などの問題はまだまだ十分に理解されていません。

必要なことは、生物多様性へのリスクに注意し、森林破壊を食い止める方針を導入する他、適切な FSC の森認証を取ることです。さらに日本製紙とオパール社に対し、州政府から原生林の木材を調達しないように働き掛けることでしょう。

質問: 現在、プラスチック製品から紙製品への世界的な転換が進んでいるが、その動きによって、オーストラリアでの森林伐採が加速する可能性はあるか?

リンデンマイヤー氏: プラスチック製品から木材製品への移行自体は歓迎すべきことです。ただし、問題はその木材製品をどこから調達するかです。ビクトリア州やニューサウスウェールズ州の南部では、火災、生物多様性、炭素などへの影響を考慮し、木材製品を人工林から調達する必要があるとされています。日本製紙はビクトリア州政府に対し、代わりの原料を人工林から提供することを要求すべきです。そしてビクトリア州の環境団体や科学者などと協力し、人工林が認証されるための努力をすべきです。それにより、全ての紙製品が FSC のロゴを持てるようになります。そして適切に設計され、管理された人工林からの紙製品として販売するといいいでしょう。人工林の面積当たりの木材生産量は天然林より 14 倍も多いことが分かっています。天然林は生物多様性、水、炭素、観光のために使い、人工林は木材製品のために使うべきです。ビクトリア州の人工林は天然林のわずか 5 パー

セントの面積で、天然林よりも多くの木材を産出できます。さらにそれを持続可能な形で行うことができます。環境団体、科学者グループ、政府、企業などが連携すれば、この問題を速やかに解決できるはずです。

6月30日公開